



TITLE:

「吐蕃」・「羊同」などの名稱について

AUTHOR(S):

佐藤, 長

CITATION:

佐藤, 長. 「吐蕃」・「羊同」などの名稱について. 東洋史研究 1976, 35(1): 27-45

ISSUE DATE:

1976-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153613>

RIGHT:

「吐蕃」・「羊同」などの名稱について

佐藤 長

一

「吐蕃」は唐代に古代チベット王國の呼稱として中國で用いられ、宋・元を通じて、やはりチベットを指す名稱として、史書にその名を留めている。しかしその「吐蕃」が本來如何なる語を寫したものかについては、從來確固たる説はなかった。尤も兩唐書吐蕃傳には、「南涼の禿髮利鹿孤の子孫であるから、吐蕃といった」とか（新舊傳）、「發羌の子孫で、蕃・發は音が近いから吐蕃といった」とか（新傳）、一應の説明はある。しかしこれらは共に、兩傳が自ら或る説として掲げているごとく、牽強附會の説であつて、何人も今日これを信ずる者はいない。舊傳などはこの説の前に、「その種族は何れから出たのか分らない」とはつきり言っているのである。古くロックヒル W. Rockhill はこの語について、大要次のごとくいう。^①

唐蕃會盟碑では、チベットの支配者を Bod gyi rgyal po (チベットの王) といふ、又國名を Bod chen po (大チベット) といふ。Bod は現在、又恐らくは常にフランス語の *peu* のごとく發音され、それは中國人が、番（現代音 *fan*）の字で寫すところの音であつた。それに加えて、中央チベットのチベット人は、東方中國或はインド洋に流れる主要な河の上流に沿った中央チベットを、いつも *Teu peu* (*Stod bod*) 即ち「高地チベット」*Upper Tibet* と呼んでいる。この *Teu* の音は、中國語 *T'u* (土) によつて寫され、これより中國におけるチベットの別稱として吐蕃が出てきた

のである。

果してそうであろうか。Bod は確に現代音では *peu* に近い音であるが、唐代には文字通りの發音であったと考えられ、番 *p'wan* とは一致するところがない。Stod bod という語については、ロックヒルはチベット内地を旅行しており、或はそのような言葉を聞いたのかもしれないが、Bod stod ならともかく、Stod bod という形は不自然な感を與える。それに Bod に「番」を與えるのが無理とすれば、これだけでも彼の説は成立しなくなるであろう。

又那珂氏は元朝秘史の譯の中で、「吐蕃は蓋し字篇の音譯」と注するが（成吉思汗實錄、四四九頁）、勿論前説同様、音は不一致で説明にならない。

ところで最近山口氏はこれについて新説を出した。氏は古代チベットの傳承に、チャー *Phywa*（古代音チャー *p'ja*）なる王名があるのに注目し、それよりその系統の一族がビャーと呼ばれ、更にそのうちヤルン溪谷 *Yarlung* にいた系統が南方寄りに居たのでロビャー *Lho phywa*（南のビャー）と稱され、これに蕃の觀念を重ねてロビャーが吐蕃と寫されたのだという^⑧。山口氏の考えには、ビャーが中國では發羌と寫されたとする前提があるが、それが正しいならば、傳説的な王名としてはともかく、部族名としてビャーは實在したことになる。その點は我々も肯定できるが、しかし *Lho phywa* なる語はチベット文獻に全くない言葉で、それから「吐蕃」を説明するのはやはり無理といわなければならない。

それでは「吐蕃」という語は他に理解すべき方法がないのかということになるが、それについて次に私なりの考えを述べてみたい。

古代王朝が中央チベットに起り、青海方面に支配の範圍を擴げたとき、最も強力にこれに抵抗したのは吐谷渾であった。吐蕃の王ソンツェンガンボは貞觀八年（六三五）に使を唐に遣し、突厥・吐谷渾の例にならって公主の降嫁を求めた。しかしそれが吐谷渾の裏工作で止められたので彼は怒り、吐谷渾を攻撃し、これを青海の北に驅逐した（新舊傳）。引續きソンツェンは二十萬の軍を率いて松州（四川省松潘縣）に入寇した。中國の記録では、唐・吐谷渾と吐蕃との關係は

これから始まるが、同じチベット高原に住むものとして、吐谷渾は當然それより以前に、吐蕃の存在を知っていた筈である。それでは吐谷渾は吐蕃を何と呼んでいたかということになるが、實はその呼稱が「吐蕃」で、吐蕃という名稱は吐谷渾を経てリレー式に唐に伝えられたものと考えたい。

ただ吐谷渾は文字を持たず、従って吐谷渾文字の文獻は存在しない。しかしペリオ氏 P. Pelliot は吐谷渾について記した中國の文獻から吐谷渾語を拾い、その検討によって、吐谷渾の支配者たちを蒙古語族と推定した^②。この推定は一つの優れた見解としなければならぬが、事實唐代の青海・チベットの地名には蒙古語に近いものが少くないのである。しかしこれらの蒙古語的地名は、當然本來は吐谷渾語であつたと考えなければならぬ。

二

ところで唐初の頃のチベット狀態を考えると、吐蕃の王は既にヤルルン溪谷から西進し、ラサを中心とするウイ Dbus の地方を征服していた筈である。しかし舊傳は、

弄讚（ソンツェン）は年若くして位を嗣ぎ、性質は勇武で經略の才に富み、その隣國の羊同やもろもろの羌族は皆これに服従した。

といい、ソンツェンによって羊同（ツァン地方。後述）が服従させられたことを明かにしており、又、

弄讚は羊同と聯合して兵を出し、吐谷渾を討った（舊傳）。

弄讚は「吐谷渾の反間工作を聞いて」怒り、羊同をひきつれてともに吐谷渾を攻撃した（新傳）。

とあって、當時ウイ・ツァンは現在のように完全に一つにはなっていないのである。従ってウイは一つの集團・地域であり、ツァンもまた一つの集團・地域であつて、吐蕃はその直接支配地域をウイと稱し、自らをウイ人 Dbus pa と稱したことが豫想されるのである。ケーパーガトン（一九丁裏）には、チベットの初期にその地が五大翼（又は地方）Ru

30 chen lha に分たれたことをいふ^⑤

シャンにはイ^ハ翼 G-yas ru とその支翼 Ru lag

ワイにはウ翼 Dbu ru と^ニ翼 G-yo ru

支翼スンバの翼 Sum pañi ru を加えて五翼に分てり。

と説明する。そのうちウ翼の存在は、敦煌文書編年記によって、六八四年まで遡らせることができる。

〔六八四年（嗣聖元年）〕大論ソエンニヤ Bsan sña はウ翼下部 Dbu ru god のレガム Re skam に集會を開きたり
(DTH. p. 35)°

〔七二四年（開元十二年）〕大論チスムジ^ハ Khri sum rje は、夏にウ翼下部 Dbu ru god のチウルン Leñju lun に集會を開きたり (DTH. p. 47)°

これによってウ翼なる言葉が、かなり早くから用いられたことが知られるであろう。恐らくこれに伴ってワイ Dbus なる言葉も使われるようになったと思われる。同じケーバーガトン（十八丁裏）には、六人組織 Khos drug の存在をいふ、

三人のシャン Shan は^ハン Blon とともにワイの集會 Hdun sa を司る。

三人のバーデ Dpah sde は國境の城塞 So kha を守る、

それらをチベットの六人組織という。

とあって、先の例とともにワイという言葉が現れている。ウ翼（頭翼・中央翼）というのはツェンポの直率部隊なるが故の呼稱であり、その所在の地域なる故にワイ（中央）という語でラサの地方は呼ばれるようになったのであろう。六八四年にウ翼の例が出てくるのを見れば、この組織はソンツェンガンポの時に一應の完成を見たのではないかと思う。フーランテプテル Hu lan deb ther には、ソンツェンが、「四つの翼を千戸部 Stoin sde に分った」ことをいうが、或はこれは四翼・各千戸の組成が事實であったことを傳えているのかもしれない。

敦煌文書にはウイの例は、現在のところ見當らないが、トルキスタン文書には、只一つウイ人の例が挙げられる (TLTD, Pl. II, p. 435)。

ウイ人 Dbus pa の支隊のもの Ru yan (yan) lag pa' 大ノブ Nob ched po に來たれり。

これも確實な年代を擧げることとはできないが、ケーパーガトンの記述と合せて、チソンデツェンの頃までには Dbu ru, Dbus, Dbus pa の語は實質的に成立していたと考えてよいであろう。

問題は Dbus の音である。この音は現在はいうまでもなく *ɹ* 又は *ɹ* であるが、古代チベットの時代に、その音は綴字通りであつたかどうか。先ず添前詞の *d*-音については、九大尙論 Shan blon ched po *deu* が尙論掣通突瞿と轉寫されるごとく *deu* (九) は突瞿 *tust ki'u* と寫されて、明かに音としての存在を示している (古代史、七二三頁)。添後詞の *s* については、唐蕃會盟碑のチベット側盟誓者の名に、ロンギェブサンドェン Blon rgyal bzah *hdus kon* があるが、これは論類藏寫悉恭と寫されている (古代史、九〇一頁)。*hdus* が寫悉 *duo siēt* と轉寫されているからには、添後詞の *s* もまた當時は確實に音として存在したのである。ただ *db*-の場合、*b*-がどのような音價を持っていたかは、その例がないので確定できない。しかしガル氏 Mgar の出身で唐と戦い、後に投降した贊婆 tsan b'uā が Bsan ba であること (古代史、三三四頁)、廣徳元年の長安占領のチベット軍司令官の一人尙贊摩 ziang tsan *b'uā が Shan bsan ba であること (古代史、五五三頁) などの例からすると、*db*-は *u·w* 又は消滅音ではなくて、やはり文字通り發音されたものとしなければならない。しかしそれにしても Dbus では、「吐蕃」とは音の上で尙一致する點は何もない。

そこで考えられるのは Dbus, Dbu と同意義の Dbun·Dbud なる語である。^⑤ 兩語とも現在では殆ど使われていない言葉であるが、古代においては或る程度用いられて、Dbus の例からすれば、やはり綴字通りの發音であつたであろう。この Dbun が吐谷渾において *Tübün なる形で受容され、更にそれが吐蕃 *t'u biwen* と轉寫されたのであろうというのが私の考えである。又 Dbud が吐谷渾において用いられたかどうかとも明かでないが、突厥碑文の Tüpüt がこの語の系統

を引くことはまちがいないと思う。添前詞の *ɥ* が吐谷渾語・突厥語で *ɥ* となるのは、當時既に語頭子音としての *ɥ* は軽い音となっており、前例の突瞿の場合、突 *tʰuat* で寫され、吐蕃の場合、吐 *tʰu* で寫されていることで理解できるであろう。

注意すべきは次の点である。當時の碑文・敦煌文書、或はその頃の狀勢を述べたと思われる文獻などには *Dbu · Dbus*、*Dbus pa* という形は確に存在する。しかし *Dbun · Dbud* という表現は絶えて存在しない。とすればこれらの語は或は吐谷渾における彼支配民族羌族の語で、中央チベット語 *Dbu · Dbus* に對する同義語として用いられ、それが吐谷渾の支配者に採上げられて、唐・突厥に傳えられたのであらうということである。

三

ところで「吐蕃」という文字は、果して唐において初めて作られたものであらうか。次にこれについて少しく考えを費してみたい。吐谷渾は遊牧民族であり、前にも觸れたごとく文字は持っていなかった。しかし梁書（卷五四）河南王傳には、吐谷渾という族名の由來について、

吐谷渾孫葉延頗識書記、自謂曾祖奕洛干始封昌黎公、吾蓋公孫之子也、禮以王父字爲國氏、因姓吐谷渾、亦爲國號。と述べている。葉延の知る書記とは明かに中國文字を書記することであり、「王父の字を以て國氏となす」というのも中國における傳承である。又通典（卷一九〇）邊防六吐谷渾傳には、吐谷渾より第六代視艱に至るまでのそれらの君主について、

皆有才略、知古今、司馬・博士皆用儒生。

といっており、古くから儒者を用いて軍事・教學を司らせていたことを示している。又前掲梁書同傳に、第十二代拾寅について、

拾寅立、乃用書契。

とあり、これも中國文字による文書を用いたことをいうのであろう。葉延のことは傳説的ではあるが、拾寅が中國字の文書を利用したことからすれば、それと矛盾しない傳承といつてよい。又同傳天監十五年（五一六）の條には、

其地與益州鄰、常通商賈、民慕其利、多往從之、教其書記、爲之辭譯、稍桀黠矣。

とあり、梁側の民が通商に出かけ、文字を教えて通譯をさせたため、吐谷渾は漸次狡猾になったという。この文字も明かに中國の文字と見て差支えない。従つて、唐の高祖・太宗初期の頃は第十七代伏允の時代であり、中國文字の使用は一段と擴がつていたに相違ない。とすれば「吐蕃」という寫し方は、吐谷渾で作られ、それが唐に傳えられたと考えてよいであらう。「吐蕃」が唐代初期から突然現れ、一代を通じて變ることなくそのまま用いられ、しかもその由來を中國人自身が説明できないのは、既に吐谷渾において熟した文字を唐が移入したとして初めて理解できることである。

勿論、「吐蕃」は最初ウイの地方を指し、その他の諸種族を含まなかった筈で、それ故大小羊同・蘇毗・白蘭などと並記されていたのである。その後の吐蕃の膨張はチベット全體を包むようになり、前にも觸れたごとくその名は宋元時代へと傳えられ、チベット全體の呼稱となったのである。しかしそれは中國だけに用いられた語であり、その他の地域にはTüptüの語が傳播してゆき、西方では回教徒の手を経てヨーロッパに擴がり、Thibet・Tibetとなった。

尙東方では遼がこの語を用いている。遼史卷二〇・三六・四六・七〇・一一五などに見える鐵不得國は突厥からウイグルを経て傳えられたものと思われる。元朝祕史卷一には脱字都惕なる語があり、那珂氏はこれを脱字都の複數形とし、今のチベットを指すものと注釋する（成吉思汗實錄、四四九頁）。勿論契丹族を蒙古語族とする限り、Tüptüのp音はここではb音に變っている筈で、白鳥氏の轉寫では脱字都惕はTobodudとなっている（音譯蒙文元朝祕史、續集卷一、四七a）。その後現代に至る蒙古語では、チベットはTöbed・Tangudが並び使用されている。

四

さて第二の問題は羊同國である。これについては先に兩傳によつて、ソンツェンガンボが、「隣國の羊同」を服従させた、或は彼が吐谷渾攻撃には、「羊同と連合して兵を出した」という例を挙げたが（二九頁）、それを見ると、羊同は吐蕃と密接な關係をもっていたことが分る。この語は難解で、現在まで説を出したのは藤田・トマス E. W. Thomas・山口三氏だけであろう。藤田氏は慧超傳に出てくる楊同國を羊同國と同じものとし、大羊同國については釋迦方志の説に従つて蘇伐刺拏瞿咄羅 *Suvarnagotra* 即東女國、即大羊同國とした（慧超傳、三二丁左）。又小羊同國も方志の記載に従い、多分現在のシガツェ或はキャンツェの地方で、ヤムドク湖 *Yar hbrog msho* はその遺名であろうとしている（前掲書同丁）。しかし方志の記す大小羊同の方位は、藤田氏自身が注意することく、通典・文獻通考の方位と全く異っている（前掲書三二丁右）。従つて氏の比定は、小羊同はともかくとして、大羊同は先ず信用できない結果になっているのである。トマス氏はチャンタン高原が羊同だと主張するが（*AFL*, p. 8）、通典（卷一九〇、邊防六）の大羊同國を見れば、その國はそれなりの豊さを持った國で、到底極寒の高原、人跡稀なチャンタンではあり得ない。山口氏の説は、羊同をツァンの西方のヤト *Yastod* に比定するのであるが、先ず音の不一致からして成立しないと思う。

この問題解決の手がかりは、前掲通典の大羊同國の項である。その位置については、

大羊同國、東接吐蕃、西小羊同、北近于闐、東西千餘里、勝兵八九萬人。

とあり、吐蕃の西にあり、その西に小羊同國があったことをいう。吐蕃を先に述べたごとくウイの地に比定すると、大羊同は如何にしてもツァンの地方を指すことになる。そこで思い起すのは、ツァンの地方を南東から北西にかけて流れ、ツァンボ河に注いでいるニャン河 *Nian chu* のことである。この河の流域はニャンロ *Nian ro*（ニャン地方）とも呼ばれ、チベットで最も肥沃な地域となつており、古くから農耕が行われている。このニャンロは敦煌文書ではミャンロ *Myan ro*

と書かれており (DTH. p. 83) この語が羊同 *iang d'ung* と寫されたと思われるのである。しかし語頭の複子音は如何にも一致しないではないか。この疑問に答えるためには、やはり吐谷渾をこの間に介在させねばならない。

蒙古語では語頭に *mya* という音がくる言葉はなく、吐谷渾人もこの音は發音できなかった筈である。従つて *mya* の音素日は脱落して、*myan* は *yan* と發音されたのであらう。ro の場合の *r* が *p* と交代するのは塞外言語の常例である。ro 又は *do* が *d'ung* で寫されるのは、西北方言で *ung* が鼻音化するためであらう。例えば *Cog ro* が燭龍 *liwong* と寫られ、*dkar mo* が鵲莽 *rwat mwang* で寫されるごとくである。ミャンロが羊同で寫されたのは「吐蕃」同様、吐谷渾の發音、或はその轉寫字をそのまま中國側が受容れたからに相違ない。

ところで興味あるのは、冊府元龜 (卷九六六、外臣部) 繼襲に、ツェンボのチドゥン Khri b'dus sron の即位について、儀鳳四年 (六七九)、不夜弄讚卒、嫡子器弩悉弄即大臣麴薩苦之甥也、先與薩苦往年同、徵發兵馬、聞喪歸國、繼位爲贊普。

とあることである。^⑩ 資治通鑑の調露元年 (六七九) 二月壬戌の條にもほぼ同じ文が記されており、通鑑では麴薩苦は麴薩若、年同は羊同になっている。しかし麴薩若は確に正しいとしても、年同は羊同の誤りと簡單には決定できない。というのは年同 *nien d'ung* の方が一層、音において現代音 *Nan ro* に近いからである。これは如何に考えるべきであらうか。思うに *Myan* はこの地方では既に *Nan* の音に變りつつあったが、東方から來た吐蕃人は尙 *Myan* と發音していたのではなからうか。當時のチベット語の *myi·mye* は皆そのままの發音であり、*Myan* が「年」で寫されたのは、一ヤン地方の變りつつあった音をそのまま傳えたからではなからうか。このツェンボ交代のときは、既に吐谷渾は吐蕃に征服されており、情報吐蕃から直接に受取られたもので、吐蕃はこれを現地ニャンから採っており、その故に中國側ではより原音に近い年同なる轉寫を残したのでないかと思う。「年同」は決して冊府元龜の誤寫ではなく、通鑑がそれを羊同としたのは、歴史的記述として誤ってはいないが、「年同」の資料的價值を果して理解していたかどうかは些か疑わしいものとい

わなければならない。^⑧

五

ところで大羊同が一つの國をなしていたとすると、その中心は何處にあったであろうか。現在ニャン河の流域で最も大きな都市はギャンツェ Rgyan tse < Rgyal rtse > シガツェ Shi ga tse < Gshi ka rtse > であり、その何れかが大羊同の中心であったであろう。そのうちギャンツェはニャン溪谷の中心に位置し、事實現在インドからの交通路は、ここで北東ラサへ或は北西シガツェへと分岐するのである。恐らくここが大羊同の中心即ち王城のあった所と考えるべきであろう。その正しい綴字 Rgyal rtse は、古い時代には Rgyal mkhar rtse (王城の山) と綴られ、この語はチベット文獻に散見する。少しく後代のことになるが、第五代ダライの佛教史には、バグモドゥ王朝時代のギャンカルツェ Rgyal mkhar rtse の諸侯の系譜を記し、中にバグモドゥ王朝に最も信頼された人物としてラブテンクンサンバグバ Rab brian kun bzani lphags pa を擧げてゐる (TPS, p. 646)。トゥッチ氏はこの諸侯がギャンカル王 Rgyan dkar gon ma と呼ばれたことをつづける (IT, IV, Pt. I, p. 61)。Rgyan dkar は音にならうた書き方で、Rgyal rtse を Rgyan tse と記すのと同様のものではない。そこで通典大羊同國の項を見ると

其王姓姜噶、有四大臣、分掌國事。

とあり、王姓は姜噶 *kiang kât* だという。これこそ Rgyal mkhar (王城) を寫したもので、王は、「王城に住む人」の意で Rgyal mkhar ba とでも一般に呼ばれたのであろう。中國人がその通稱を王の姓と考えたのはあり得ることと思われるのである。^⑨

敦煌文書吐蕃王統記には、古代チベット初期の諸王侯の表があるが、そのうち大羊同に該当すると思われるのは (DTH, p. 83)。

ニャンロ Myan ro の中部は、ツァン Rtsan の君主トェカル侯 Thod kar' その二人の顧問官はスルッ Su ru ン
ナン Gnan。

とあるもので、これによれば、吐蕃王國の初期にはトェカルなる名の王侯がいたことが明かになる。又それがツァンの君主と呼ばれているから、羊同ニャンロツァンの等式から羊同ニャンツァンであることはもはや疑いない。敦煌文書の Rtsan が即ち現在の Gtsan であることも動かしがたいところとなるであろう。ギャンツェの歴史は古く、その城塞には大羊同國王がいたことは以上で明白になったと思う。

それでは對應する小羊同國は何處にあつたのであろうか。これも羊同というからにはニャン河流域の中にあつたことは疑いなく、現在のシガツェがこれに當るとして差支えあるまい。

尙興味あるのは古代チベット王國の末期、落門川討撃使論恐熱^⑧ Blon khon bsher が攻撃した鄯州節度使尙婢婢について、新傳は、

婢婢は姓は沒廬、名は贊心牙、羊同國の人である。代代吐蕃の大臣となる家柄である。

といっていることである。沒廬はロ氏 Hbro' 贊心牙は Bsan sun ya であろうが、彼が羊同國人というのはロ氏がもともと羊同の名家であつたことを思わせる。右の通典の文には、「四大臣がいて國務を分掌している」ことをいうが、二氏は右の王統記で分るとしても、他の二氏は不明である。或はこの不明の二氏のうちにロ氏は含まれているのかもしれない。ケーペーガトン（一九丁裏）には、古代チベットの十八支配地域表 Dban ris nam pa bco bgyad というのがあり、上部・下部ツァン Gtsan stod・Gtsan smad の支配者としてロ氏とキヤンボ氏 Khyun po が挙げられて、ロ氏は明かにツァン即ち羊同の支配階級であることを示している。同じく軍事組織表においては、ツァンの支翼 Ru lag の翼隊長 Ru dpon の二人に、キヤンボ氏とともにロ氏が挙げられており（ケーペーガトン、二〇丁表）、ロ氏は「代代吐蕃の貴相」（新傳）ではあつたが、本來はツァンの貴族の系統だったのである。

通典大羊同國の項の最後には、「古より〔中國に〕未だ通じない」といって、更に、

大唐貞觀十五年、遣使來朝。

という。貞觀十五年（六四二）は、ソンツェンガンボが降嫁する文成公主を青海の畔まで親迎した年で、吐蕃としても開國以來最も勢力の伸長したときである。しかしこの時期でさえ、羊同が遣使來朝したというのは、未だこの國が或る程度の主權をもち、吐蕃に完全に服屬していなかったことを示している。尤もこれ以後、羊同の使者は全く來朝しないから、多分遠くない時期に、この國は吐蕃の組織内に組入れられたのであろう。前掲冊府の文には、チドゥソンが卽位の直前に、大臣の麴薩若と兵馬を徵發しに羊同に行っていたことを記しているが、これによれば儀鳳元年（六七六）までの間に、彼等は吐蕃に完全服屬していたのである。トゥッチ氏が、「羊同は六七九年頃、チベットに服從した」というのは（PR, p. 104）「儀鳳四年」（六七九）をそのまま信じたからで、實は誤りとしなければならぬ^⑨。

ところで長慶の初め、劉元鼎が唐蕃會盟のため（八二二）、ラサに赴いたときの道程に、黃河上流の渡涉點を述べ（新傳）、その南三〇〇里に三山があり、中に高くて四方に低くなっている山があつて、紫山と呼ばれている。ここが大羊同國で、昔のいわゆる崑崙なるものである。

とあつて、この山の間に黃河水源があるとする。ここに出てくる大羊同國が問題であるが、位置は黃河水源のオドンタラ Odun tala（いわゆる星宿海）の西方に當ることにならう。原典の南三〇〇里は明かに西三〇〇里の誤りとしなければならぬが、現在オドンタラの北西方には、源流マチュ Rma chu（瑪楚河）の出る所として烏蘭得錫山がある（乾隆内府輿圖九排西二）。同文志（九三九頁）の烏蘭特什鄂拉 Ulaian tesi ayula の説明には、

特什盤石也、山有盤石、色微赭、故名。

とある。紫山というのは、この遠山が赭色に青色のかかった色をしていることから出た名であり、「いわゆる崑崙」というのは、大凡この山のあたりが崑崙山脈の東端である故に、右の説明は或る程度眞實を傳えていると思われる。しかしこ

のあたりが大羊同國というのは一體如何なる意味であろうか。大羊同國をギャンツェ地方とする右の解釋では、黃河源の地方までツァンの勢力が、しかも八二〇年代まで存在したなどは到底考えられることではない。従つてこの羊同國は何等かの誤りということになるが、實はその西は有名なチャンタン高原 *Bryan than* に連るのである。そこで或はこのチャンタンが吐谷渾によつて羊同と誤つて傳えられたのではなからうかとの疑が起る。Bryan は確に現在 *blan* の音であるが、語頭の *bya* は當時は綴字通りの發音であつたに相違ない。しかし蒙古語では、語頭に *bya* なる音が來ることはなく、*bya* は多分 *pa* を脱落して *ya* と發音されたであらう。とすればそれは一應、羊同に音の上で一致する。元鼎は吐谷渾語的な發音を聞いてチャンタンを羊同と思ひ込んだのではなからうか。臆測を逞くすれば、元鼎の案内人は吐谷渾人であつて、彼がその音による名稱を元鼎に傳えたとも考えられるのである。

とにかく羊同はニャンロの音譯で、その國は現在のツァン地方に當ることは誤りないものとしなければならぬ。ただ注意すべきは、現在ニャン河流域では、ギャンツェ地方を高地ニャン *Nai stod* 又は小ニャン *Nai chun* というが、これが大羊同で、シガツェ地方は低地ニャン *Nai smad* 又は大ニャン *Nai chen* で、小羊同であることである。ニャン流域で、經濟の發展は吐蕃時代或はそれ以前ではギャンツェ地方が早く、それ故に政治的權力の發生もこの地方が先であつたのであらう。後代になる程シガツェの方が發展し、政治的中樞もこの地方に移つていった。大羊同 || 小ニャン || 大ニャンであるのは一三〇〇年間におけるニャン流域即ちツァンにおける歴史の變遷をそのまま現しているとみてよい。

六

右に述べたごとくウイ・ツァンがそれぞれ吐蕃・羊同に當るものとすれば、その南のネパール・ブータンは、當時何と呼ばれていたのであらうか。ネパールは兩唐書西域傳・通典(卷一九〇、邊防六)・大唐西域記(卷七)・慧超傳に、泥婆羅・尼婆羅などの項があつて問題はないが、ブータンに當る記述は一向見當らないようである。ブータンはチベット文獻では

ドゥク國 Hbrug yul と稱され、ブータン人はドゥクパ Hbrug pa と呼ばれて、現在もこれらの稱はブータン人自身によつて用いられている。しかしこれらの名稱は、多分チベット佛教の一派ドゥクパ Hbrug pa がこの地に弘通してからのもので、そうとすれば、それは十五世紀以降のこととなる。とすると唐代の頃には全く記録がないことになるが、どうも新唐書(卷二二上、西域傳上)摩揭它國、通典(卷一九〇)邊防六に見える悉立國がこれに當るのではないかと思われる。

悉立 *siēt liap* については、以前にペリオ氏がチベット語 *Gser rabs* に還元し、それを大唐西域記(卷四)・慧超傳の蘇伐刺拏瞿呬邏・蘇跋那具怛羅 *Suvarṇagotra* と同一の國として、クルータ *Kuluta* の近傍にあるものと見た。⁵⁵⁾ しかしこの還元は餘りにも巧妙に過ぎた考えで、事實 *Gser rabs* なる國名は何等チベット文獻に見出されず、位置についても些か西へ寄り過ぎてゐる。その後、氏は悉立を敦煌文書編年記に出てくるセリブ *Se rib* の對音であるとしており(DTH, p. 42, fn. 3) この方が音の上では正確に一致すると考えられる。しかしそのセリブの位置が何處かという点、新しい見解は何等述べられていない。同文書王統記には、チベットの小王國として *Sribs yul* なる形もあるが(DTH, p. 84)、これも同一の國を指したものであろう。そこで一つの試みとして悉立國の位置について、ペリオ氏とは別に見解を立ててみよう。前掲通典にはこの國について次のような説明が行なわれている。

悉立在吐蕃西南、戸五萬、有城邑村落、依溪澗、丈夫以繒綵纏頭、衣氍褐、婦人辮髮、著短裙、以蒸報爲俗、畜多水牛、殺羊雞豕、穀宜秬稻麥豆、饒甘蔗諸果……羈事吐蕃、自古未通中國○大唐貞觀二十年、遣使貢方物。

この國には家畜に、水牛・雞・豚があり、穀物には秬稻・麥・豆があり、他に甘蔗・諸果物があつたというから、これは到底チベット地域とは考えられず、従つてヒマラヤ山脈の南側にその存在を置かなければならない。而して吐蕃の南西で、「溪澗に依る」とあるからには、やはりヒマラヤ山中の何處かでなければならぬ。この條件に合う地域も廣いが、ウイに近いことを考えれば、それは正にブータンのバロ *Spa gro* 地區でなかろうか。中尾氏によれば、この地帯は、「ブータン國內でいちばん豊かな谷間であり」、それは巨大なバロ城 *Spa gro rdson* を生み出した程である(祕境、七九頁)。

現在の首都はこれより峠一つを越したティンブクであるが、それ以前はやはりここがブータンの中心地域だったのである。こととチベットとの交通は、北西に進んでチョモラリ山 Jo mo lha ri の南トレモラを越え、パリゾン Phag ri rdson に行き、ここから北東ギャンツェに至る。しかも現在このルートを通じて「ブータンから運び出される荷物は主に米であり」(前掲書一〇三頁)、一日百頭以上もの駄獣がここを通っている(前掲書同頁)。稻の栽培の全くできないチベットでは米は貴重品であり、それがブータンによって供給されていることが分るが、その米は唐代にも供給されていたとすれば、悉立國の穀産として記される「秬稻」に一致するではないか。家畜としてチベットにはない鶏や豚も確にこの地には存在するのである(前掲書七四頁)。

ただ右の文に水牛とあるのは「昔からインド東北部のアッサムやナガヒルで蠻族に飼われていた」ミタン牛のことであろう(前掲書二二八頁)。「ミタンは足がやや短く、體格は水牛に似ているが、頭の上に褐色の毛がオカッパのように生えている」という(前掲書二二〇頁)。恐らくこのミタン牛が、水牛の系統と考えられたのであろう。

又「丈夫は繪綵で頭を纏み」、「婦人は短裙を著けている」というが、これは現在のブータン人にはない風俗である。チベット人は十五世紀頃に南下してブータンに入り、現在のブータン人の主流となったが(前掲書二二三頁)、それ以前は、現在南ブータンの照葉樹林内に住む民族が先住していたに相違ない。中尾氏はこれを、「ヒマラヤ的」な原住民といっているが(前掲書六一頁)、その服裝については何も觸れていないので、果してこれが唐代の悉立國人に當るかどうかは分らない。

尙國名の Srib たちをチベット語で考えると、大山の日の蔭になる、従つて北側の斜面をいう言葉である。チベット側から見れば、この國はヒマラヤの向う側にはなるが、その南斜面に當り日蔭の地域ではない。ただバロの南側にはトレモラの南から南東に向つて山脈が走り、その北側にパロチュ川 Spa gro chu が流れ、パロゾン Spa gro rdson が存在している(前掲書一〇三頁、地圖)。この山脈の名は明かでないが、強いていえば、この山脈の北面 Srib たちパロ地域は存在す

るのである。

七

悉立に次いで、通典(卷一九〇)邊防六が掲出しているのは章求拔である。

章求拔、或云章揭拔、本西羌種也、在悉立西南、居四山之内、近代移出山西、接東天竺、遂改衣服、變西羌之俗、其地延袤八百里、勝兵二千餘人、居無城郭、好爲寇掠、商旅患之、聞悉立入朝、亦遣使朝貢。

章求拔 *tšang g'iau b'wät* は *ts'ang* > *Ljoŋ* *rgyu pa* (彷徨する人) の音譯で、悉立の南西に住しているが、城廓はなく、放浪して寇略を仕事としていた故にかく呼ばれたのであろう。パロの南西で、四面山に圍まれた地は *チン・グ Chu hbi* の溪谷と考えられ、「近頃山西に出て、東インドに接するようになった」というのは、多分チェンビの西のブータン・インド國境の山を越え、シッキム地區 *Hbras ljön* に入つて、東インドのインド人に接觸するようになったことを意味するのであろう。「本は西羌の種」でありながら、「衣服を改め、西羌の俗を變じた」というのも、本來チベット族であるにも拘らず、インドの影響で風俗が變化したことを示している。「勝兵二千餘人」ということからしても、この種族は大した意味をもつ存在とも思われないが、貞觀二十年、悉立の入朝を聞いて、その王羅利多菩伽 *la lji ta b'uo ka* > *skt. Lal-tabhoga* が遣使入貢し、王女策の中天竺討伐にも援兵を出して功があったところを見ると(新唐書卷二二一上、西域傳上、摩揭陀國の條)、一個の獨立國をなしていたことは疑いない。ただこれが現在如何なる種族を指しているのかは明かでなく、恐らく後のシッキム王國の初期のものであろうことが想像されるだけである。勿論現在のシッキム王國は、後世のチベット人の南下によって作られたもので、章求拔とは關係ない國家である。

さて私は右に吐蕃・羊同・悉立・章求拔など、唐代におけるチベット諸族を取上げ、その位置を比定してきた。それは

通典の記載の順に従ったのであるが、或はそれは一見極めて恣意的に列擧したごとく見えるかもしれない。しかしここに擧げられた諸族の位置は、實は當時のチベット・インド間のルートを示しているように思われるのである。

吐蕃の中心地はいうまでもなくラサである。ついで大羊同はギャンツェであり、悉立はブータンのパロ、章求拔が最初チュンビ、移動してシッキムとすると、これは全く近代のラサ・インド間の交通・貿易ルートではないか。章求拔に關して、「好んで寇略するために、商旅がこれを患えていた」というからには、このルートは唐代にも明かにチベット・インド間の貿易ルートだったのである。貿易ルートの上にある故に、悉立・章求拔の諸國は入吐蕃道の媒介によつて唐の名を知り、「朝貢」し來り、文獻にもその名を残すようになったのであらう。唐代には、インドへの使節や求法僧で、入吐蕃道を利用したと思われるものが若干存在している。しかし彼等がラサからインドへ向うとき、何れの道を通過したかは從來不明のままであった。ここに初めて基本的と見られるルートが明かになったのである。尤も吐蕃はネパールとも密接な關係があり、カトマンドゥを通過する道も確にあつた筈である。しかし最短のインドへの道は確にこのブータン道、即ちラサ・ギャンツェ・パリゾン・パロ・チュンビ・カリンボン・ダージリン（シッキム南邊）を通過するルートであつたに違いない。悉立・章求拔諸國に關する記録は、吐蕃の初期のような古い時代にも、チベット・インドの間には「商旅」が通じていたことを如實に物語る貴重な史料でなければならない。

註

- ① W. Woodville Rockhill, Tibet, a Geographical, Ethnographical, and Historical Sketch, derived from Chinese Sources, Journal of Royal Asiatic Society, London, 1891, p. 5.
- ② 山口瑞鳳「吐蕃の國號」日本西藏學會々報第十八號、昭和四十七年、二頁。
- ③ Paul Pelliot, Notes sur les T'ou-yü-houen et les Sou-pi, T'oung Pao, vol. XX, 1921.
- ④ トッチ氏 G. Tucci はケーバーガトン一九丁表以下に記された、古代チンミットの内部組織に關する記述を表にして出している (P.R. p. 77)。
- ⑤ 稻葉正就・佐藤長「フウランテンペルーチベット年代記」

京都、昭和三十九年、九三頁。

- ⑥ 尙質摩は尙質磨とも書かれるが（古代史、五九六頁）、敦煌文書におけるチベット綴字による摩・磨の音は 'a' である（羅常培「唐五代西北方音」國立中央研究院歷史語言研究所單刊甲種之十一、上海、一九三三年、一七頁）。

- ⑦ Dbuñ y Jasche, Tibetan-English Dictionary; Das, 'Tibetan-English Dictionary' 格西曲札「藏文辭典」、楊質夫「藏漢小辭典」にあり、Dbud は格西曲札前掲書にある。

- ⑧ 小野川秀美「突厥碑文譯註」滿蒙史論叢第四、京都、昭和十八年、二八二頁、二八九頁。

- ⑨ 山口瑞鳳「蘇毗の領界」東洋學報第五〇卷四號、東京、一三一一四頁。山口氏は大羊同をヤトェとし、その位置を低部シャニンヤン Shai shuin smad に比定している（前掲論文、六一頁註一三三）。

- ⑩ ro yu と同じで、「地域」・「地方」の意味というのがトウツ氏の考えである（IT, IV, Pt. 1, p. 49）。トウス氏も ro を地域・地方の意にとらえる（AFL, p. 9）。但トウス氏がヒヤンロの地方をヤルルン溪谷に置いているのは（Ibid.）全くの誤りである。

- ⑪ この文中の固有名詞の解釋は既に別稿で行なった（古代史、三三九頁）。又チドゥソンの即位は、儀鳳元年（六七六）であつて儀鳳四年ではない（前掲書、三三六—三三八頁）。

- ⑫ 同文志（一三—四頁）は 'Nai chu' を仰楚で寫しており、その説明には、「西番語、仰地名、因地以名其水也」とある。現在同文志の編纂者で名を知られているものは中國人のみである

が（榎一雄「乾隆朝の西域調査とその成果」史學雜誌第五八編三號、七二頁）、或は知られない協力者に蒙古人のラマ僧などが入っていた可能性があり、それがこのような形で現れたのかもしれない。榎氏もこの書の編纂に、「會同四譯館の諸員、北京在駐のラマ僧等もこれに參與したことがあったらう」と推測している（前掲論文同頁）。尤も同書では、'Nai chu' を尼雅楚（同文志一三—二頁）、Shin chu を寧楚（前掲書一三—四頁）と寫している例もあり、これらよりすれば仰楚の場合は寧ろ例外的な轉寫である。

- ⑬ 山口氏は、姜噶を Khyab rgod の對音とし、この族は玉樹地方に存したものとするが（前掲山口「蘇毗の領界」二五頁）、とらない。

⑭ 落門川（洛門川）は水經注に、落門西山より出て東流し、北して渭水に入る三府谷水を指しているのであろう（森鹿三・日比野丈夫「水經注（抄）」中國古典文學大系二一巻、東京、昭和四十九年、三三一頁參照）。その河口附近に落門聚があり、軍事的要點となつているので（前掲書同頁）、論恐熱はここに駐していたと思われる。この地は現在の地名でいえば、甘肅省の甘谷縣と武山縣の間の渭水南岸である。その沿革については讀史方輿紀要卷五九伏羌縣落門聚の條に詳しい。

- ⑮ ドックパの本山は、ギャンツェの南東のラルン Lha lun にあり、中興の祖といわれる十三代ギェルワンクンベル Rgyal dban kun dpal（一四二八—一四七六）がチベット南部に積極的に布教してからこの地方に弘通し、十八代ガワンナムギェル Nag dban nam rgyal（一五九四—一六五二）が、ツァンの

シンシャ、*Shin gag pa* (當時のツァンの覇者)と不和となつてブータンに亡命してから(一六二六)、ブータンのドクパ化は決定的となった(中井英基「チベットにおける佛教教主の相續形態——ドクパ派におけるク・オンの相續をめぐって——」『橋論叢第六三卷第六號』、一九七〇年、八八頁)。尙ガワンナムギェル及びその子孫の事蹟並に史料については Luciano Petech, *The Rulers of Bhutan c. 1650—1750*, *Oriens Extremus*, 19 *Jahrgang*-Heft 1/2, Wiesbaden, 1972. 参照されたい。

- ⑨ P. Pelliot, *Autour d'une traduction sanskrite du Tao Tō King*, T'oung Pao, 1912, p. 358.

⑩ 現在シッキムを「チベット人はレンジモン Hbras ljön と呼んでゐる。清朝時代の記録では「この國は「哲西雄」と記されるが、これはレンジモン Hbras mo ljön (米の國)を寫したものである。Hbras (米)は又 Hbras mo と綴られるからである。」

略語表

新傳＝「新唐書」卷一四一・上・下、吐蕃傳上・下。
舊傳＝「舊唐書」卷一四六・上・下、吐蕃傳上・下。
同文志＝「西域同文志」東洋文庫複製本。
成吉思汗實錄＝那珂通世「成吉思汗實錄」第三版、東京、昭和

十八年。

慧超傳＝藤田豐八「慧超往五天竺國傳箋釋」第二北京版、民國二十年。

秘境＝中尾佐助「秘境ブータン」、東京、昭和三十四年。

古代史＝佐藤長「古代チベット史研究」上・下、京都、昭和三十三年・三十四年。

ケー・ヤン＝Dpah bo gtsug lag hphren ba, Mkhaz pahi dgañ ston, edited by Lokesh Chandra, Pt. 4, New Delhi, 1962.

AFL＝F. W. Thomas, *Ancient Folk-Literature from North-Eastern Tibet*, *Abhandlungen des deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin*, 1957.

DTH＝J. Bacot, F. W. Thomas, G. Toussaint, *Documents de T'ouen-houang relatifs à l'histoire du Tibet*, Paris, 1940—46.

IT＝G. Tucci, *Indo-Tibetica*, Rome, 1932—1941.

PR＝G. Tucci, *Preliminary Report on two Scientific Expeditions in Nepal*, Rome, 1956.

TLTD＝F. W. Thomas, *Tibetan Literary Texts and Documents concerning Chinese Turkestan*, London, 3 vols, 1935—55.

TPS＝G. Tucci, *Tibetan Painted Scrolls*, Rome, 1949.

On the Appellations of '*Tu-fan*' 「吐蕃」, and
'*Yang-tong*' 「羊同」, etc.

Hisashi Satô

Since the era of the Ancient Tibetan Kingdom, this country and its people were called *Tu-fan* 吐蕃 in the Chinese literatures and *Tüpüt* by Turkish. There have been some assumptions about what *Tu-fan* 吐蕃 or *Tüpüt* meant, but none of them are reliable.

In my opinion, it was probably derived from the Tibetan vocable, '*Dbun*' or '*Dbud*' (central). The governors of the Ancient Tibetan Kingdom called Lhasa and its environs '*Dbu*' or '*Dbus*' (central), when they occupied that district. Among the words of *Qiang* tribe 羌族, '*Dbun*' or '*Dbud*' probably corresponds to '*Dbu*' or '*Dbus*'. So the Chinese characters of 吐蕃 were adopted for '*Dbun*' by *Tu-yu-hun* tribe 吐谷渾族, which ruled *Qiang* tribe 羌族 in *Qing-hai* 青海 district and had already known the Chinese writing. On the other hand, '*Dbud*' was immediately introduced into *Tu-jue* 突厥, and therefore '*Tüpüt*' is found in the Orkhon Inscription.

Next, *Yang-tong* 羊同, which is said to have been to the west of *Tu-fan* 吐蕃, can be assumed to have been derived from '*Myan-ro*', which means the Nan River basin. *Tu-yu-hun* 吐谷渾, one of the old Mongolian tribes, couldn't pronounce 'mya', so that 'm' dropped off when the word was introduced, and then the Chinese characters of 羊同 were used. Hence, Great *Yang-tong* 大羊同 and Small *Yang-tong* 小羊同 were small kingdoms, the former of which was in the Rgyal rtse region and the latter

in the Gshika rtse region. It is not to be disregarded that when *Tu-fan* 吐蕃 rose, there was *Tu-yu-hun* 吐谷渾 between *Tu-fan* 吐蕃 and the Empire of *Tang* 唐.

Besides, *Xi-li* Country 悉立國, which was to the south-west of *Tu-fan* 吐蕃, may be Spa-gro in Bhutan, and *Zhang-qiu-bo* 章求拔, which was to the west of *Xi-li* Country 悉立國, was *Ljon rgyu pa* (roving tribe) and may be assumed to have lived in Sikkim district.

A Study on the Existing Family Registers in *Kai-yuan* 開元 Era

On Ikeda

In this article, I investigate the system for the family registration from the late seventh century to the mid-eighth century in *Tang* 唐 period, by reference to certain materials recently discovered in an old tomb of the Turfan basin and the registers in Japan in the beginning of the eighth century. Thus, I aim to make clear the actual conditions of the annual *shou shi* 手實, *ji zhang* 計帳 and *mao ding* 貞定, and the actual way of ranking of each family, which was practiced every three years. On the other hand, I modify partly the opinion of Mr. Shun Suzuki on the chronology of making registers in *Tang* 唐 period, and assume that the registers had been made in each year of the Ox, the Dragon, the Ram and the Dog from the start of *Tang* 唐 to the beginning of the twenties in *Kai-yuan* 開元 era, and then those practices were out of fashion in the twenties.